

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 48 2017年3月

政府機関関連への協力	ロシアのセミナー講師体験記……………	2
	タンザニア産業貿易投資省での産業開発アドバイザー業務……………	3
赴任前研修	「中国赴任あれやこれや！」海外赴任者生活安心セミナー……………	4
自治体・中小企業支援	フィリピンの防災に冷や汗・奮闘で寄与 ―中小企業の抱える輸出課題―……………	5
教育	4年間の大妻女子大学キャリア講座を終えて……………	6
留学生支援	日本語を教えてくださいませんか? ～日本語教育を学び、実践する6ヵ月～……………	7
	ABICが教えてくれた国際化―女性会員の視点から……………	8
新刊紹介	『最新 航空事業論』(第2版)……………	9
	『1500語でマスターできる貿易英語―グロービッシュにも対応―』……………	9
エッセー	68歳にて、ハーバード大学に留学……………	10
事務局だより	関西会員懇親会を開催……………	11
	会員の種類……………	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数……………	12
	賛助会員入会のお願い……………	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

ロシアのセミナー講師体験記

ひるま やすお
 蛭間 康夫 (元 小松製作所)

ABICの高塚コーディネーターから要請をいただき、2016年10月にロシアでセミナーを行う機会を得た。「製造工程における品質管理」という講義テーマだったので、機械メーカーの製造部門経験者である私が起用されたようだ。私は、これまでロシアへは渡航経験がないばかりか、実のところロシアに対して良い印象を持ってはいなかった。しかしながらソ連崩壊後の大きな変化、特に近年は街が明るく人々は開放的になっているとの情報も入っていたので、実際に確かめる良い機会と思い、本ミッションをお受けした。

セミナーの依頼元はロシア国内に6カ所設置されている日本国外務省管轄の日本センター。毎年多様なテーマでロシアのビジネスパーソン向けにセミナーを開催しているとのこと。今回はロシア西部で全4回の巡回セミナーである。講義は通訳付きで6時間の長丁場だ。資料作りは、言葉や文化の異なる受講生が理解しやすく、長時間でも飽きさせない進め方等々に頭をひねった。演習問題を含めて120ページの資料をなんとか完成させて、翻訳を依頼し、いざ渡航となる。

成田からモスクワのシェレメチェボ空港へ10時間のフライトを経て、空港ホテルで1泊後、国内線に乗り継ぎ2時間、最初のセミナー開催地であるエカテリンブルクに到着。この街は、欧州とアジアの境界であるウラル山脈の東側に位置する工業都市で、ロシア革命でニコライ2世一家が悲惨な最期を遂げた地としても有名である。セミナーの受講生は皆とても熱心で積極的なリアクションがあり、予想以上に順調なスタートだった。

翌日、ウラル山脈を越えてロシアの旧都サンクトペテルブルクに移動。今回のセミナーを企画された当地日本センターの松原所長は、商社勤務時代からソ連・ロシアに駐在し、長年にわたり両国の交流に尽力されている。サンクトペテルブルクはロシア2番目の大都市で、人口100万人を超える都市としては世界で最も北に位置する。セミナー会場は世界遺産の市街にある大学で、古都の歴史を感じつつ80人の受講生の熱気に包まれた。

次はムルマンスクへ移動、北極圏にある都市と



サンクトペテルブルクでのセミナー風景
 (左から筆者、通訳、副学長、松原所長)

しては世界最大で、軍港を持つ不凍港として知られている。小さな空港から車で約1時間、ロシアでは珍しい起伏のある道を進み街中のホテルに到着。オーロラを期待したが、時期尚早とのことで残念。会場はホテル内の小さな会議場だったが、外の寒さとは無縁の白熱した議論を行った。

モスクワに戻り、当地日本センターの浜野所長の同行を得て電車で2時間半、最後のセミナー地カルーガへ。浜野所長もソ連・ロシア駐在が長く、同国の文化や歴史に造詣が深い。ここでは思いがけずテレビ局の取材があり、「この地域で改善すべき点は？」と聞かれ、初めての地なのにいきなりこの質問はないでしょう！と内心焦ったが、セミナーの趣旨等を説明し切り抜けた。後日ニュース放映を見ると、思いの外大きく取り上げられていたので本当にびっくりした。

各地のセミナーに共通して言えることは、数多くの積極的な質問を受けたことだ。その内容にはQCサークルのような時間外活動や労使の関係に関するものがあり、国情の違いをあらためて認識した。ロシアに対する訪問前の印象は良い意味で裏切られ、見たものは洗練された欧州の清潔な街並み、礼儀正しく親日的な人々であった。付け加えると、地方色豊かな料理がとてもおいしい。ぜひ再訪したい国である。



セミナー会場



カルーガで
 (左から筆者、スタッフ、主催者、浜野所長)

政府機関関連への協力

タンザニア産業貿易投資省での産業開発アドバイザー業務

タンザニア産業開発アドバイザー **くまがい ひろし**
熊谷 弘 (元 トーメン)

2015年5月より東アフリカのタンザニア産業貿易投資省に産業開発アドバイザーとしてJICAから派遣されている。

JICAとの縁は、弁理士資格取得後の2009年6月から2年間シニア・ボランティアとしてウズベキスタン国タシケント国立経済大学で教授をしたのが初めである。2012年8月からはベトナムで裾野産業支援に2年間携わり帰国、翌年早々 JICAがタンザニアの産業貿易省に派遣する産業開発アドバイザー募集中とのABICの案内を受け応募、数回の面接を経て合格し、2015年5月末に着任した。

もともと私は1976年にトーメンに入社、鉄鋼輸出本部に配属され、まだソ連であったモスクワ駐在を振り出しに米国のヒューストン、ニューヨークと計13年ほどの駐在経験がある。取扱製品のほとんどが先進国で使用または加工されることから、中国を含む発展途上国との関わりは世紀が変わる前後からである。特にJICA関連では常に新環境下の業務なので、予断を排し現地の方の自主性を生かすよう粘り強く働き掛けることを心掛けている。

タンザニアは1961年英国より独立以来、継続して革命党が政権を握り、2015年10月の大統領選挙でも同党のマグフリ現大統領が選出されている。しかし大都市などでは反対党が躍進し、そのためか、腐敗の追及、現在の実際の首都ダルエスサラームから法律上の首都ドドマへの2020年までの政府機能移転と並び、産業化（工業化）の推進と中進国への向上が提唱されている。

私が配属されている産業貿易投資省の産業開発局は、その名の通り産業化の参謀本部として政策、制度を提言する役割を担っている。タンザニアは2000年以降GDP7%以上の高成長を遂げているが、商品価格高騰などの背景があったのは間違いなく、内実を伴う成長には一層の外資導入および国内人材育成が不可欠である。



湾口フェリーから見た高層化が進むダルエスサラーム市内



2016年日本のDMMが開催したABIC (African Business Idea Cup) タンザニア最終選考会で審査員を務める (着席中央が筆者)

そこで現在私が主に助言・協力しているのは、東南アジアでの経験に基づき、産業化の推進力である内外民間企業が事業を行いやすい環境（法制度やインフラなど）整備とそれを実現するための行動計画の分野である。また、当国にJETRO事務所がないので、日系企業からの照会や訪問への対応も積極的にしており、連絡いただければ幸いです。

決定までの過程の分かりにくさ、計画を支える予算の慢性的不足など課題は多いが、治安の良さ、素直な人間性、共通言語スワヒリ語による部族を超えた国民意識など、初代ニエレレ大統領の遺産は健在で、今後の成長、日本企業の進出につながることを期待している。同大統領は、私が大学時代に知ったUjamaa（家族の絆、共同体、社会主義等と訳せる）で著名な第3世界の旗手の一人であり、何か縁を感じている。

生活面では、インド洋に面しており海洋魚類があるのが日本人には助かると思う。気候は海岸部では一年中暑く、内陸部は高原なので日較差が大きいですが、少し過ごしやすい。赤道に近いので日焼け対策が必要である。



2016年10月に開業し交通渋滞解消に貢献し始めたBRT (Bus Rapid Transit)

赴任前研修

「中国赴任あれやこれや！」 海外赴任者生活安心セミナー

たかぎ すみお
高木 純夫 (元 伊藤忠商事)

2016年8月にABICから、「公益財団法人福井県国際交流協会」主催の「海外赴任者生活安心セミナー（中国編）」のお話を頂いた。既に開催された「東南アジア編」に次ぐ第2弾。副題は「中国赴任あれやこれや！」。まさしく私にぴったりのテーマ。わくわく感一杯で準備にいそしんだ。

「公益財団法人福井県国際交流協会」は、県全体の国際化推進の拠点として、国際交流に関する諸事業の開催や県内に居住する外国人の生活相談等幅広く活発な活動を行っている。セミナー開催前、事務局の方と何度か打ち合わせを重ねたが、「福井県下の多くの方々に近隣諸国への関心と理解を深め、将来の各種交流の弾みとしてもらいたい」との強い気持ちを感じ取ることができた。

2016年12月22日、場所は「福井県国際交流会館」。師走の慌ただしい中、二十数人の皆さまに参加いただいた。中国／台湾駐在20年間を通じて肌で感じた中国の真の姿や中国人との付き合い方などを思う存分語らせていただいた。

まずは「中国駐在おめでとう！ 中国で学べることは一生の財産。心配されることは何もない。積極果敢に飛び込んで下さい！」とエールを送るべく臨んだ。しかし「中国ってどんな国？」「中国人との上手な付き合い方は？」「中国はこれからどうなっていくんでしょう？」など、いろいろな視点で中国への関心をお持ちであった。「近そうで遠い中国」を何とか「思ったよりずっと近い中国」にすべく話に熱が入った。

まずは、中国を取りまく環境と中国の内情、今後の向かうべき方向性など基礎概念をワンポイントレッスン風にお

話し、

- ・住んでみて初めて分かる中国（人）のすごさ
- ・中国人との異文化交流の極意

に話を導いた。同時に駐在員として忘れてはならない心の持ち方として、

- ・中国で働けることへの感謝の気持ち
- ・理解／信頼を深める努力と相手への尊敬の気持ち

をお話しさせていただいた。休憩を挟んだ後は、中国駐在時代の懐かしのアルバム集を上映。写真の一枚一枚から生の中国を感じ取っていただいた。

近年、日本のいずこを問わず人口減少や少子高齢化への対応が急がれている。アジア人材の活用も重要課題。そのためには自治体／企業／個人、皆それぞれが日本国内のみならず広く海外にも目を向けられるグローバルな気持ちを持つことが大変重要だと考える。福井県には、中国を中心に多くの国々の方が学習や仕事に励んでおられる。そして、日本人の親切さや日本の街の綺麗さが大変印象深いと語っている。日本人がこれまで海外の方から頂いた温かい気持ちを、この日本で外国の方にお返しできれば、双方の人材の定着にも大いにつながっていく。

今回の私の話が、福井の皆さまの中国理解・進出に少しでもお役に立てば大変うれしく思う。福井県には有数の繊維／機械／眼鏡産業が集積し、一部は中国でも地道に事業展開をされている。企業間や学校間の交流拡大を通じ、「福井」の名がさらに全世界にアピールされることを期待してやまない。



セミナー風景

フィリピンの防災に冷や汗・奮闘で寄与 —中小企業の抱える輸出課題—

みやこし ただはる
宮越 忠晴 (元 日商岩井)

私は2013年からABICの中小企業の海外進出支援活動を続けているが、毎回薄氷を踏む思いの連続である。今回はその一端の冷や汗劇を紹介したい。

私が担当する支援企業が、フィリピンのイロイロ市向けに、河川の洪水早期警報装置を据付け渡し条件で契約した。これはJICAの「草の根事業」を活用してフィリピンで推進している「コミュニティ防災事業」の一環であり、頻繁な洪水に悩まされている地域住民に対し、水位が警戒レベルに達すると瞬時に警報を発し避難を促す装置である。警報装置メーカーは、豊富な実績を有する横浜市のユニメーションシステムである。

それでは、今回の冷や汗劇第一幕に入ろう。

1. 今回は据付け渡しである。ここであぶり出されてくるのは、現地事情の読み誤り、あるいは楽観視である。日本の常識で考えること自体が「非常識」であることを学ぶ良い契機となる。途上国では付きものの各種の課題を学ぶのである。その第一幕は現地通関で切って落とされた。
2. 契約前の作業として、現地までの輸送費総額の見積もりがある。「転ばぬ先の杖」とし、「関税その他必要経費一切を含んだ見積もりを取ること」と強く勧めた。かつ、才数から現地通関に手馴れた国際クーリエ社からの相見積もりを推奨したが、日本の輸送大手N社からの見積もり取得のみであった。だが、これで輸送上のリスクは回避できたはずである。
3. ところが、マニラで通関ができないとの一報を受けた。N社の説明ではイロイロ市が輸入の権利を持っていないと

いう話である。早急に解決するにはxxxドル必要、また市が許可申請をすると1ヵ月以上はかかるとの解説付きであった。極めて眉唾な話である。しかし、日本の大手N社の説明であり、また通関費用は一切含まれているはずゆえ??が重なった。

4. ユニメーションシステムはN社に何度も説明を求めた。次なる回答は、これはFacilitation feeとのこと。話が見えてきた。そこで、ユニメーションシステムに見積もりは現地通関費用一切を含むことを再度確認してみた。返事はノーである。茫然自失。N社横浜支店から現地店では関税を見積もれないとの説明を受け、ユニメーションシステムで推測したとのことであった。「非常識」が顔を覗かせた。しかし、この一言で舞台裏が透けて見えた。N社の現地担当と税関が絡んだ狂言であろう。それをうのみにするN社横浜支店のお粗末さ。しかし、貨物は敵の掌中にある。対策はいくつか浮かんだが、いずれも時間のかかる恐れが強い。今度は納期遅延という言葉が脳裏をかすめた。
5. このままでは現地の実態が全くつかめず、イロイロ市の担当者に調査依頼をかけた。詳細説明は省くが、最終的には地元業者を使い無事通関・納入も完了した。費用xxxドルの発生はなかった。となれば、本狂言の震源地はN社現地担当者にならうか。今回のようなことは海外に不慣れた企業なら誰にでも起こりうる「常識」である。第二幕(据付け)は、また機会があれば!

今回最大の成果は、引き渡し式における地域住民の感謝の言葉とその満面の笑みである。



本件のために立てた電柱に警報器具を据え付ける作業



イロイロ市長Mr. Mablogとの面談風景。機材の無償供与に対し感謝の意を表明されたもの(右から2人目が筆者)



引き渡し式での近隣住民との記念写真。背景に見えるのが警報装置(最後列、ボールすぐ左が筆者)

教育

4年間の大妻女子大学キャリア講座を終えて

一般社団法人日本貿易会 政策業務グループマネージャー なかむら しほ 中村 志保

母校で講演することになって

2013年から大妻女子大学「キャリア学習講座」に登壇する機会に恵まれた。「キャリア学習講座」とは、就職活動を控えた大学3年生を対象に行われるキャリア支援プログラムである。他ならぬ母校からの依頼に、これまでの経験が少しでも後輩の役に立てばと思い、引き受けさせていただいた。「就業継続力」というテーマの中で、私に与えられた講演のお題は「ワーク・ライフバランス」。身近な存在である卒業生として、仕事と結婚、出産、子育ての両立の経験談を中心に話をすることで、「今はこんなふう続けられるんだ」、「私も両方やってみたい」と、就活前の女子学生の背中を少し押してあげることが使命と理解した。

ワーク・ライフバランスについて

講演では、仕事と結婚、出産、子育ての両立の経験談を中心に、商社のワーク・ライフバランスの取り組み状況、先進的な取り組みをしている企業の紹介、社会背景とこれからの女性に求められる働き方、経済的な視点（男性の年収・生涯賃金）等々について話をし、彼女たちがこれからのキャリア・ライフデザインに前向きになれるよう、メッセージを送った。就活中は、目先のことに心を奪われがちになるが、長い人生の中で5年後10年後のなりたい自分をイメージしながら、企業選びをすることが大切ではないかと考えている。

また、講演するに当たり、体系的にワーク・ライフバランスを学びたいと考え、(株)ワーク・ライフバランス（小室淑恵社長）のワーク・ライフバランスコンサルタントの資格を取得した。これはとても貴重な学びであった。「ワーク・ライフバランス」とは、「ワークとライフのバランスを取ること」や「ゆとりを持ってほどほどに働くこと」と

誤解されがちであるが、どちらも少し違う。ワーク・ライフバランスは、言い換えれば「ワーク・ライフ『シナジー』」であり、ライフが充実することで、結果的にワークの質と効率が高まることを意味する。ワークとライフは二者択一ではなく、人生にとって両方不可欠であり、そして相乗効果をもたらすものである。

学生アンケートより～「仕事と家庭を両立させたい」

4年間、私の拙い講義に対して、理解力ある大妻生のほとんどが「参考になった」と回答してくれた。「働きたいから結婚・出産は諦めていたが、両立できる企業を探したい」、「働くことはネガティブなイメージだったけど、私も生き生き働いて仕事も家庭も両立させたい」、「女性が仕事をすることはマイナスではなく人生を豊かにするものだ」と分かった、「国も企業も女性活躍を期待していることが分かったので、自信を持って就活を頑張りたい」等々、講義前は、仕事か家庭かの選択で悩む女子学生が、講義後は働くことに対する前向きな意識変化が見られたことがとてもうれしかった。

ABICに感謝

母校での講演という貴重な機会をつくってくださった大妻女子大学宮田教授、ABIC関前事務局長、猪狩コーディネーターに心から感謝している。自分自身を振り返る貴重な機会となった他、ワーク・ライフバランスを体系的に学ぶ機会にもなり、日本貿易会ダイバーシティ（女性活躍）推進タスクフォースの立ち上げにもつながっている。政府の働き方改革が本格的に始動し、女性活躍推進の追い風は今後も続くだろう。講義に参加してくれた大妻生の未来をずっと応援している。



学生たちと（中央が筆者）



講義風景

日本語を教えてくださいませんか？ ～日本語教育を学び、実践する6ヵ月～

ABIC日本語教師養成講座講師 **ありが** **りえ**
有賀 **理恵**

「日本語教師」という仕事をご存じだろうか。この仕事をしているとよく「国語の先生ですか」と聞かれるがそうではない。日本語を母語としてではなく、外国語として学ぶ学習者のための教師なのである。続いて「外国人に日本語をどうやって教えるのですか」「英語が話せなくてもできますか」と聞かれる。その疑問にお答えするのがABICの日本語教師養成講座である。

この講座では「直接教授法」といって学習者との媒介言語を使わずに、日本語を日本語だけで教える方法を学ぶ。媒介言語を使わないのでそれなりにテクニックが必要だ。ジェスチャー、絵カード、さまざまなドリル、また視線の配り方や板書のタイミングなど、教育の現場で実際に教師が使っているテクニックを惜しむことなくお伝えしている。

半年にわたり毎週1日、朝10時から夕方5時まで日本語教育について学び、考え、実践する。週に1日といっても、課題の文型に対し教案、教材全てを準備しておかなければならないので、週の残り6日も遊んでいるわけにはいかない。また教案はチーム、ペアワークで練り上げるので、講座に出ていない日もクラスメイトとの話し合いは続く。他にも教室を出て外国人の視点で街を歩く「屋外見学」、日常生活で見る日本語の標識や注意書きを「やさしい日本語」に書き換える課題発表など、アクティブに日本語教育について考える半年間である。

この講座は座って理論を聞いている時間は多くはな

い。もちろん日本語教育についての基礎理論は学ぶが、メインの授業は実践授業である。与えられた文型を基に毎回自分が教師になった想定でクラスメイトを相手に授業を行う。お台場にある東京国際交流館で行われている日本語教室を見学し、模擬授業をする機会も与えられている。実際の外国人学習者を相手に授業をすると、頭では分かったような気持ちになっていても、準備したことがその通りに使えないことや、分かるだろうと思って話すことが理解してもらえないなど、予期せぬ事態に次々とぶつかる。それが受講生の皆さんの刺激にもなり、次の授業づくりの指針になる。

こうして半年を過ぎる頃、「どうやって教えるのだろう」という疑問に受講生一人一人がその答えを見つけ、それを実際の教育現場で試す自信が育まれているように感じる。事実、多くの修了生が修了後に日本語教育の現場に入っていく。地域の日本語教室や海外に派遣されている方など活躍の場はさまざまだ。実は修了後も多くの受講生の方から講師に質問が寄せられている。質問は私たち講師の頭を悩ませるものも多く、その時は既に受講生が講師と同じ「日本語教師」となっていることを感じるうれしい瞬間なのである。日本文化がさまざまな形で国外へ出ていき、日本に興味を持つ外国人が日本を訪れる今、まだ日本語教師の数は十分ではない。言語、異文化、人と人との交流にご興味のある方、ぜひ一度日本語教師養成講座をのぞいてみてください。



留学生支援

ABICが教えてくれた国際化—女性会員の視点から

瀬尾 佐和子 (元 天津ライフライン有限公司)

それは、気が付けば20年の単身赴任生活になっていた中国天津市からの一時帰国で日本に滞在していた夏のことだった。ベトナム駐在中にお世話になったM氏から「ABICって知ってる？ 日本語交流とか国際貢献しているボランティア団体なんだけれど、女性会員が少なく探しているから、ま、瀬尾さんも女性といえば女性だし」と声を掛けられたのが始まりだった。まさに伴侶や両親のことで日本帰国を迫られ悩んでいる時であり、背中を押されるようにABIC関西デスクを訪問し、コーディネーターを紹介され、気が付けばABIC関西・暑気払いの会に座って入会の自己紹介をしていたのであった。私など足元にも及ばない経歴と経験を持っておられる諸先輩方々を前にして、緊張の中にもエネルギーと歓迎の温かさを感じ、陶醉の境地であったのを覚えている。悩むことなく帰国を決心し、あらためての異文化遭遇に不安を感じながら合計20年の中国天津市での生活を引き揚げた。

日本帰国後、兵庫国際交流会館の留学生との日本語交流活動に参加させていただくことになり、天津市在住の日本人駐在員支援活動の一環であるインターナショナルスクールでの日本人生徒・保護者の学習・進路指導、異文化理解、現地日本語学習者への支援経験を活用して交流活動を楽しんでいる。

ABICの日本語交流活動は、一般的な日本語教室とは異なり、日本語を通じての交流を活性化する目的であると私は理解している。実際に言語というのは、意思疎通のツールであるが故にその根底に流れている文化意識は非常に大切だ。文法や語彙を習得することはコンピューターのプログラミングと同じであるが、私たちは人間である。その人間として学習する喜びを知り、知識を深め、知恵を育てていくには、疑問を持つことが始まりになる。「なぜだろう？」と感じるのが全ての学問の始まりであり、それを学び、追

求し、自分なりの答え、「そうなんだ！」を探し当てる。その喜びこそが学習の成果だ。言葉も同様に、自分の考えをどのように人に伝えようか、どのように表現するかを模索す

ることで学習する。そのようにして身に付けた母語を基に第2言語を学習していけば効果的である。日本という異文化社会に飛び込んできた留学生と共に疑問や発見を分かち合いながらお互いに考え、留学生の自文化と比較しながら討議する90分はあっという間に過ぎてしまう。

上述以外にも、講演の機会を得た高校生国際交流の集いで知り合った留学生や日本の高校生だけでなく、彼らを支援する学術関係者にも感銘を受ける。大津市の中学との交流後の生徒からの手紙は私の宝物だ。このように何かを求め、自ら学習していく生徒、留学生、子供たちから学ぶことは珠玉である。

今、世界情勢はかつてのone worldを目指した時代とは異なってきている。政治と経済の癒着、民族、宗教闘争と世界平和に反する不穏要素であふれている。その中で、若い世代が国境や文化を超えて共に世界平和を考え実現する力をつけるには、われわれ、経験者がその経験、知恵を共有しなければならない。それはかつての私たちが生きた時代が正しいと強要するのではなく、次世代人間が文化を超え、人間として正しく生きる意味を考えていく力を養うための支援をすることだ。ABICはそのための活動を今後も続け、世界貢献をしていくものだとは強く信じている。



高校生国際交流の集いでスピーチ



兵庫国際交流会館 日本語教室風景 (中央が筆者)



兵庫国際交流会館 講師控室にて (左端が筆者)

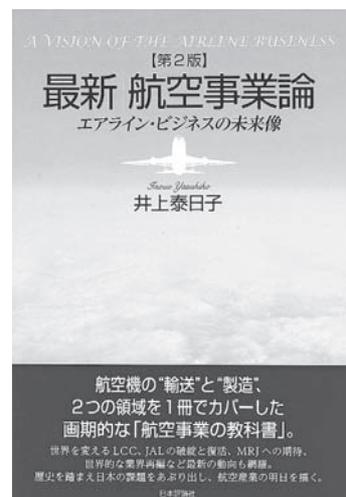
新刊紹介

『最新 航空事業論』(第2版)

いのうえ やすひ こ
井上 泰日子 (ABIC会員、元日本航空) 著 発行所：日本評論社
2016年12月10日発行 定価2,800円+税

「日本の常識は世界の非常識」と言って人気の評論家がかつて活躍していたが、「航空」の世界もそうだと思うことが多い。国連の発表によると、世界を旅行する人の数は約12億人(2015年)、利用交通機関は圧倒的に航空が多い。(鉄道のシェアは2%) なぜなら、鉄道は海を越えられないし、船は陸を移動できないからである。航空は空港さえあれば地球上どこでも行ける“グローバルな性質”を持って誕生してきたものなのである。しかし、わが国では「航空が便利か、鉄道が便利か？」などと論じられることが多い。さらに、欧米でも中国でも、航空輸送と航空機製造は一体となって国の経済と安全保障を支えているが、わが国ではこの連携は薄いものである。

本書では、このような問題意識を背景に、以下のような内容の解説に挑戦した。第1章「航空とは何か」第2章「航空の歴史」第3章「LCCが世界を変える」第4章「航空事業の特性と運賃」第5章「米国チャプター11」第6章「JALの破綻と復活」第7章「規制緩和とオープンスカイ政策」第8章「航空機製造ビジネス」第9章「三菱リージョナルジェット飛翔」第10章「空港」第11章「国際航空法」第12章「アライアンスから経営統合へ」第13章「航空保安対策」第14章「航空管制」第15章「航空の未来を予測する」第16章「航空会社と就職活動」



『1500語でマスターできる貿易英語 —グローバルビッシュにも対応—』

あらお のりみち
荒尾 紀倫 (ABIC会員、元日商岩井)、デービッド・ホン 共著
発行所：外国語学習会 四六版 定価2,300円+税

本書は、以前にこの「新刊紹介」欄で紹介した著者の「貿易英語の使い方」(2007年、同文館出版発行)に基づき、Globishの開発者の一人である米人のMr. David Honと共同でまとめられたもの。前著と同様に、取引申し込みからクレームの処理、さらに長期契約までの英文レターやEメールによるベトナムと日本の会社間のコミュニケーションに基づいて解説されている。英文は限定された1,500語(付録1)で書かれているが、貿易実務上必要な専門用語は使用してもよいことになっているので(本書では93語使用。付録2)、貿易上のコミュニケーションが自由自在にできると著者は語っている。

確かに1,500語だけで易しい簡潔な英文が書ければ、非英語圏のみならず、Plain English(分かりやすい英語)が奨励されている米英を含む英語圏においても大いに意味のあることだと思われる。英作文練習のために1,500語による短文作成問題(10問)および応用文作成問題(4問)、これらの英作文に役立つ参考データおよび解答が提供されている。英作文問題は著者が長年にわたり作成を担当してきた日本貿易実務検定協会の貿易実務英語問題(A級およびB級)に準拠している。

また、重要文法事項(付録3)には1,500語から約5,000語の派生語を作る方法や読解および作文に必要な英文法、特に用法が難しい関係代名詞、準動詞(不定詞、動名詞、現在分詞、過去分詞)、仮定法、受動態が学習した英文レターやEメールに基づいて解説されている。



エッセー

68歳にて、ハーバード大学に留学

はりひろし
葉利 博 (元 三菱商事)

経緯

2016年6月17日より8月6日までのほぼ2ヵ月間、ハーバード大学のサマースクールに留学した。同大学文理学部ドイツ語学科である。留学手記を寄稿するきっかけとなった背景には、

- (1) 会社を退職した人にとり、それまでの経験や語学力を、アメリカの一流大学にて展開することにより自分の力を試してみることに、
- (2) 現役の企業中堅幹部にとり、いったん仕事を途中でやめて、それまでの自分を見直すチャンスとして、アメリカの大学で挑戦してみることに、
- (3) 海外留学を志す人の数が激減している現状下で、留学を志す同輩のご子息である入社して数年の、若い人ないしは大学生に対する一種のアドバイスを送ること、

の三つがあった。なお、海外留学は、費用がかさみ大変であるが、ハーバードのサマースクールは費用も少なくすむということもあった。私の場合は、上の(1)が該当する。

準備のため、英語のbrush upに取り組んだ。TOEFL 100点以上合格を目標に、listeningとspeakingを徹底学



Harvard Yard

習した。願書の締め切り近くになってもスコアが基準点に達しなかったが、ハーバードの試験に挑戦したところ、100点満点で97点を取得し、入学許可がおりた。これ以外の入学の条件として、B型肝炎等9種類の予防接種証明書、授業料等11,550ドルの支払い等が必要であった。どこからも推薦状は頂かず、自分の力で勝ち取った、いわゆる「無欲の勝利」である。

授業内容

学部は、春と秋の学期は各4ヵ月間・15週間で授業が行われるが、夏はその半分の2ヵ月間・7週間で春・秋のカリキュラムを学習する。これは、通常の学科の半年間から、科目によっては1年間のvolumeに相当す

る。予習・復習に1日10-15時間勉強をした。クラスメート11人の内、日本人は私だけで、残りはall Americanであった。

取得単位

学部学生の年間取得単位である32 creditsの内、今回で8 creditsを取得し、全教科の25%を消化した。結果、大学より届いた正式な成績証明書では、A（優；12段階の上から2番目）を取得。

サマースクールの実態

総学生数：約2,800人で、国籍は100ヵ国以上。中国人が300人で、続いて、インド人、ドイツ人が200人前後、中国、インドが経済的に台頭し、それが如実に現れている。

大学の寮：Adams House、Quincy House等、近郊に

13余りの寮が存在する。小生は中でも最も古いAdams Houseに居住したが、小生



Adams寮外観

が居住していた1階の部屋の斜め筋向いには、合衆国第32代大統領Franklin Delano Rooseveltが、ハーバードの学生であった1900-1904年に居住した部屋があったが、今では国の記念物に指定されている。他には、元国務長官Henry Kissingerの部屋もあった。

図書館：Widener（ワイドナー）Libraryという、全米では3番目の規模を誇る図書館がある。タイタニック号沈没

で亡くなった卒業生Widenerの遺志を継いで完成される。大学



Widener図書館外観

全体の蔵書量は、1,450万冊に達し、大学図書館では世界最大である。

学生食堂：ハーバード・ヤードの北側のMemorial Hallの建物内に、Annenberg Dining Hallがある。映画ハリーマン・ポッターに出てくる魔法学校の講堂は、これをまねている。700人収容可能で、壁は欧州歴代の国王を飾ったステンドグラスで囲まれている。クラスの雰囲気：教授は、nativeに合わせて猛烈な



ドイツ語クラスの仲良し3人組と一緒に

スピードでしゃべるが、大切なポイントは半分程度。話に付いていくには、ポイントを徹底して予習し、それにまつわるvocabularyを固めることである。

ハーバード大学の近況（2014年度）

志願者数：34,295人

入学許可数：1,662人（4.9%）

授業料/寮費/学生保険等：64,000ドル（約700万円）

親の負担額：12,150ドル（19%）

各種奨学金：48,850ドル（ハーバード大学、連邦政府、民間企業等76%）

ハーバード基金：360億ドル（3兆7,000億円）

大学院：Harvard Business School、Harvard Law School等12校存在し、卒業まで6-7年、Oxford等

の3年に比べて、ほぼ倍かかる。授業料等は年間約1,000万円。



Harvard Business School外観

野外活動

せっかく建国発祥地であるボストンのハーバード大学に留学した以上、New Englandの自然や歴史的遺跡に触れない訳にはいかず、週末は、大学が主催する野外遠足に参加した。ボストンの南側の辺り一帯はケープ・コッドと呼ばれ、周辺にはJ. F. Kennedy等の大統領ならびに富豪の別荘がある。ボストンは、ニューヨークよりも寒く、2月は零下20度になり雪も多い。建物と建物の行き交いは、地下のトンネルを通じて行われ、また、それぞれ独立した食堂がある。

感想

日本人は基礎教育がしっかりしており、英語のハンディさえ突破できれば、決して、謙遜することはない。中国人、インド人は、よくしゃべり、派手なことも平気で行う。ハーバードに入学許可されたのだから、多少の開き直りも必要。思い切りアメリカ生活を楽しむことである。ハーバードは教授陣が優れており、生徒の面倒見が良い。優秀な生徒が世界中から集まっており、素晴らしい出会いもある。私も気力の続く限り、歴史か経営学で再び挑戦してみたい。同輩・後輩諸兄が、積極的に挑戦されることを望む。

事務局だより

関西会員懇親会を開催

2017年3月7日（火）18時より、ホテルグランヴィア大阪「孔雀の間」において関西会員懇親会を開催しました。ABIC関西地区を中心とする約60人の参加者を得て、河津日本貿易会専務理事のあいさつおよび乾杯の後、参加者の活発な交流が行われ、親睦を深めました。



河津日本貿易会専務理事あいさつ

会員の種類

種類	内容	年会費	
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体	1口 50,000円
		個人	1口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体	1口 10,000円
		個人	1口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	— —

(2017年2月末現在)

正会員

団体・法人（17社）〈社名五十音順〉

〈10口〉 (一社)日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（11名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 実郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男 岡 素之
 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫〈3口〉 小林 栄三 槍田 松瑩〈3口〉 市村 泰男

賛助会員

法人（4社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ (一社)国際行政書士機構 NPO法人賛否両論〈3口〉

個人（405名）

下記は2016年11月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)
 〈1口〉 荒尾 紀倫 井上 泰日子 杉浦 康之 辰己 元英 林 英二

活動会員 2,766名

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp